

令和元年度

麗澤に学んで



麗澤高校の道徳教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの。公益財団法人モラロジー研究所刊）を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道徳の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道徳の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎がまとめた格言集。公益財団法人モラロジー研究所刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、教師がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

ここでは、令和元年度の高校3年生（6年生）が、道徳の授業で発表した内容と「高校生活を振り返って」という題でまとめた作文の中から一部選んで掲載いたしました。道徳の授業だけでなく、部活動や寮生活、研修旅行などを通じて学んだ成果が表現されています。

麗澤高校で学んだこと

6年B組 佐々木 日菜

「苦しい時にはつらい方を選びなさい。」この言葉は一般的によく言われていますが、本当の意味が分かったのは、麗澤高校での三年間、主に寮生活においてでした。人生には重要な選択を迫られることが何度かあります。私にとっては、地元広島を離れて麗澤高校に入学を決めたことが人生最初の大きな選択だったように思います。三年前の春、私は自分の人間力や行動力を向上させたいと思い、麗澤高校の女子寮に入寮しました。初めの頃は慣れない生活の日々で泣いてしまうことも多くありましたが、卒寮を迎えた今では、多くの宝物を得ることができたと感じています。

得ることできた宝物としてまず一つ目は、思いやりの力、すなわち共感力です。寮生活では下級生のお世話を通じて相手を思いやることを学びました。また、常に他人と過ごしているからこそ、自分のことだけでなく周りのことを考えられるようになりました。人はみんな考えていることが違っているのが当たり前であり、互いに尊重し合うことが大切であるということも、私にとって大きな学びとなりました。

二つ目はレジリエンスです。寮生活では多くの困難を乗り越えてきたからこそポジティブに考える力や、悔しさをバネに変える力、感情をコントロールする力を身につけることができました。これは麗澤高校でないと得ることのできなかつた力だと思います。

三つ目は縁です。私は麗澤高校で多くの出会いがありました。尊敬する先生方、クラスや部活動の友人、共に生活した寮生などです。いろいろな話を聞いて人生の指針にするなど、出会いは私を豊かにしてくれました。人は一人では生きていけない、家族をはじめとして多くの人に支えられて今の自分があると感じています。

以前、寮のある上級生の方が「麗澤では見えないものを育てることができる。」と話していましたが、本当にその通りだと思います。私は麗澤高校で、企業体験や皇居奉仕、留学プログラム、入試広報のお手伝いなど寮生活以外にも多くの経験をすることができました。これらは、目に見えませんが、必ず私の経験値になっています。

この作文を書いている今日この日、道徳講話で、生きる力とはHEAD（知識）、HAND（技術）、HEART（思いやり）、HARA（持ちこたえる力）であるというお話を聞きました。その時感じたのは、HEADとHANDは麗澤高校で、HEARTとHARAは寮生活で鍛えることができた私は幸せ者だ、ということです。また、この四つは、私が麗澤高校の三年間で得ることができた価値（力）なのではないかと思います。

これからも人生の岐路に立つことが何度もあると思いますが、胸を張って困難な方を選び、自分を高めていきたいと思っています。

三年間を振り返って

6年B組 小森園 旺彦

私は、高校受験をする時に、初めて麗澤に来ました。最初、校門の前に来たときは、自然豊かで広大な広さにびっくりしました。校舎に入ってみると、至る所に教訓が書かれていて、勉強嫌いの自分には、この学校で三年間過ごすことは無理だと思い、必死に勉強して公立高校に入ろうとしました。しかし、結果届かず、この学校に入学することになりましたが、今考えると、他の高校では学べないことをたくさん学ぶことができたと思います。

その中でも、一番自分のためになったと思うのは、道徳を学べたことです。最初は、正直、時間の無駄だと思っていましたが、授業を受けているうちに大切だと思い始めました。道徳の教訓とかは今でもあまり知りませんが、先生の考え方がったり、生き方がたりを聞いているうちに、自分はこんな性格になりたいとか、どのように生きていきたいとかを真剣に考えて、自分に向き合うことができるようになった気がします。

また、自分の考えの薄さに気付かされました。先生方が話すことはとても深い話が多くて、驚くことが何度もありました。なぜ、そんな多くことを人前で長時間にわたって話すことができるのか、不思議に思うと同時に、自分の知識があまりにも不足していると思いました。今は受験勉強で忙しく本を読む暇が少ないですが、受験が終わり卒業したら、まず本を読みたいと思います。そして、世の中のあらゆることを知りたいと思います。

今、将来の夢とかはありませんが、たくさん本を読んで、たくさんの知識を身につけてから、目的や目標を自分で考え、確立していきたいです。

三年間、麗澤高校で生活して、いろいろな人と出会い、いろいろな経験を積んできました。この三年間で得た人間関係や経験を大切に、これからの人生を歩んでいきたいと思います。

高校生活を振り返って

6年B組 近藤 歩

僕が麗澤高校に入学して丸二年が経ち、最後の一年ももう折り返しを過ぎた。僕は、高校から入学してきたので、中高一貫の制度に馴染むのに少し時間がかかった気がする。少しの期待と不安とを胸に入学した僕は、高校生の自由さについて浮かれてしまった。中学生のときよりも自由でできることが増えた分、逆に何をすれば良いのか分からなかったのは良い思い出。

高校生としての初めてのクラスとクラスメイトは、様々な地域から来ている人達が多かったため、たくさんの刺激を受ける機会となった。そして僕は、中学生のときよりも、友達との繋がりをはっきりと確かめることができた。体育祭、文化祭、球技大会、普段の授業…これらの中で僕は友達と何かを成し遂げること、やり遂げることがこんなに素晴らしいことなんだ、ということ

を一年目に学ぶことができた。

春になり、二年目を迎えた。中間学年として、六年生のサポートを行ったり、部活動では後輩を牽引したりする立場となった。そして、この年はクラス替えが行われる年でもあった。僕は高入生だったため、内部生と良い関係を築けるか不安であり、クラス替えの後のホームルームは多分に緊張した。しかし、それは杞憂であった。むしろ、内部生の明るい性格や人柄に魅了され、今でも自分のクラスが一番素晴らしいと胸を張って言える関係になれた。そして、いろいろな意味で思い出となったのは九州研修だ。寝ずにお喋りに耽ったり、はしゃぎ過ぎて先生に指導を受けたりと、中学の修学旅行とは比べものにならないくらい楽しかった。先生方、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。

こうして濃密な二年間もすぐに過ぎていき、とうとう最終学年を迎え、そして今、思い出を振り返りながら作文を書いている。確か、入学後もすぐに抱負について作文を綴ったが、こうして高校生活を振り返って作文を綴ると、時間が過ぎるのが早すぎると内心想ってしまう。

三年間について思うままに書いてきたが、僕はずっと考えていたことがある。それは、「自分は運が良い」ということである。この学校を両親から薦められたこと、入学できたこと、担任の先生、クラスメイトと出会えたこと…など、数えあげればきりが無い。だからこそ、半ば当たり前のようにこの環境に馴染んでしまっているのかもしれない。そのため、今まで関わりを持ってくれた方々、支えてくれた方々に、この作文で感謝を述べたい。今まで関わりを持ってくれた方々、支えてくれた方々、本当にありがとうございました。僕がこの学校で学んだ一番のものは、「感謝」であると思っている。

高校生活を振り返って

6年B組 杣澤 舞祐

私の高校生活で一番の大きな出来事は、百人一首研究会の団体戦で全国大会に初出場したことだ。

麗澤高校を受験した一つの理由が、百人一首ができるからということだった。入学後に入部して、高校一年生の秋までは、ただ楽しいという気持ちで続けていた。麗澤は練習環境に恵まれていたので、冬には大会で昇級することができた。その時から、かるたを取ることに對しての考え方が変わった。初めて大会で優勝したことで、大きな達成感を得ることができた。嬉しくて、帰りの電車では近くにいる人みんなに賞状を見せびらかしたいくらいだった。達成感と同時に、もっと強くなりたいという気持ちになった。この気持ちがあったからこそ、団体戦で結果を残せたのだと思う。

高校二年生の時には、初段になっていた。この年の団体戦メンバーはこれまでで一番段位が高く、今年は全国大会に行ける気がした。しかし、この年もあと一歩のところまで敗れてしまった。泣いている先輩たちを見て、このままで私たちの代が全国大会に行けるのか不安になった。もっ

と強くなると全国大会には行けないと身に染みて感じた。

高校三年生になって、私は団体戦メンバーの主将になった。全国大会の予選では、吐きそうになるくらいの不安と緊張だった。でも、声をかけてくれる先輩や後輩がいてくれたので緊張がほぐれ、私は恵まれた仲間を持ったことに気づいて嬉しくなった。試合では、全員が実力を出し切れていたと思う。自分自身も、三年間かかた競技をやってきた中で、この時が一番強かったのだと思う。毎年負け続けてきた高校に、私たちは実力で勝つことができた。そして、初めて近江での全国大会出場権を手にした。麗澤のかかるた部の、今まで越えられなかった壁を越えられた気がした。引退せず、まだ部活動をこのメンバーで続けられることが本当に嬉しかった。

それからの休日は、毎回練習をし、全員で本番に向けて作戦を立てた。そして、近江神宮での全国大会当日を迎えた。私たちは初戦で優勝歴のある強豪校に当たった。私は二段格上を引いた。この時、自分の役割は盛り上げてメンバーを勝たせることだと思った。私は早々に負けてしまったが、試合は接戦で同級生が格上に勝っていたり、同級同士で押されていたり、見ているだけでも心臓が潰れそうだった。最後は運命戦となり、私たちは全員が祈った。しかし、一枚差で負けてしまい、とても悔しくて皆で泣いた。言葉にできない気持ちがあふれ、初めて体験した感情だった。悔しさ、部活動を引退する寂しさ、楽しさ、嬉しさ、達成感などでいっぱいになった。

この経験は、私にとって忘れられない経験となった。麗澤の百人一首研究会に所属して本当に良かった。最高の仲間と近江神宮に来ることができたこの日は、高校生活の最高の思い出だ。

麗澤での生活を振り返って

6年D組 越川 涼花

私は幼稚園、中学校を含めて九年間を麗澤で過ごしてきました。この時間は私にとってかけがえのないものとなりました。特に高校での三年間は本当に大きいです。私は中高合わせて五年半バレーボール部に所属していました。部活をやっている中で、当たり前ですが、辛いことや苦しいことはたくさんありました。部長をやらせていただくことになったとき、嬉しい気持ちと同時に不安な気持ちが心にありました。どうすればチームが良くなるのか、部長としてみんなに何ができるのか毎日考えて悩むことが自分の成長に一番つながったと感じています。ずっとメンタルが弱かった私が強くなれたのも、感謝の気持ちや思いやりの気持ちを持てるようになったのも、最後まであきらめずにやり切ればどんな結果であれ必ず自分の満足いくものになると知れたのも、最後まで部活を続けたからだ自信を持って言うことができます。顧問の先生、先輩方、同級生、後輩のみんな、両親や多くの先生方、数えきれない方々のおかげで、このような気付きを得ることができました。のびのびと自分らしくプレーでき、なんでも素直に相談し、どんどん新しい自分になることができたのです。特に親は、一日練習や大会の日は朝早くからお弁当を作ってくれて笑顔で送り出して、応援も声を張り上げて全力でしてくれました。また、どんなにチームのことで悩んで辛くても、部長の自信がなくなっても、頭に浮かんでくるのはいつもチームのみん

なでした。ずっと私を励まし、褒めてくれ、アドバイスをくれる上、いつも周りのことを考えている、そんな良い所が溢れる仲間がいてくれたからこそ私のバレー生活は大きくて大切なものになったのです。私が一番に尊敬しているのは、そんなみんなです。その日がどんなに気分の乗らない日であっても、みんなの顔を見ると必ず元気が出る、幸せな気持ちになれるのです。本当に魔法のような力を持っているみんなが大好きです。私に出会ってくださった全ての方々に感謝し、この思い出を胸に、どんどん成長していけるように死ぬまで努力をし続けます。本当にありがとうございました。

麗寮で学んだこと

6年G組 渡邊 清子

私は、この三年間で通学生には学ぶことができない寮教育を学びました。大変な事ばかりで辛いと思ったことも多々ありましたが、今思うと全て将来役に立つことばかりだと気づきます。

今から2年前の4月4日に期待3割不安7割で入寮したあの日、私の生活と心がけは180度変わりました。様々な地域から来る仲間と一つ屋根の下で生活することは、大変なことでした。入寮して次の日にはホームシックになったり、寮の仕事がなかなか覚えられず悩んだりしていた時に、支えてくれたのは同級生でした。私にとって同級生は第二の家族ともいえるほど、本音で話し合えたり、相談できたりする仲間です。私が部屋っ子という立場を無事乗り越えることができたのは、同級生のおかげと言っても過言ではありません。そして私が最も難しいと感じたのは、部屋中という立場です。部屋っ子の時には上級生から言われたことだけをやっていればよかったです。部屋中は相手を第一に考えて行動しなくてはなりません。自分の心に余裕が無ければ思いやりの心を持って指導することはできませんし、入寮したての部屋っ子に指導するにはどうしたら良いか、どうやったら寮生活の不安を取り除いてあげられるかと悩むことばかりでした。指導させていただく立場を通して、相手の立場に立って考える視点を養うことができました。

最高学年では、部活、勉強、寮生活の3足のわらじをはき、それを全てこなすことの大変さに悩みました。寮では部屋長という立場になり、寮全体の自治を行います。今ある寮の笑顔あふれる温かい雰囲気は、部屋長の発言や行動で大きく変わってしまうだろう、と気持ちを引き締めて取り組めたのは、二年間寮教育を学んだからこそできたことでした。下級生に背中を手本を見せることで自身のリーダーシップや責任感、行動力を育みました。また、受験生として寮生活を両立しながら合格を目指して日々努力することで、自分の限界を越える喜びと達成感を得ることができました。

三年間の寮生活は私にとって学びしかありませんでした。社会に役立つ人材を育成するこの麗寮は宝の山だと強く感じます。麗澤高校在学中に、かけがえのない仲間と出会い、家族や多くの先生方に支えられ日々精進する中で、常に多くの学びと気づきを得られたことは、全て自分の糧になりました。これらの貴重な経験を次のステージである大学、更には社会でも役立て、恩に報い

られる人間になりたいと考えます。

三年間を振り返って

6年G組 渡辺 崇靖

私はこの麗澤高校での生活を振り返って、数えきれないほど多くのことを学んだと思います。私は一貫生なので、六年間の麗澤での生活は、今の自分の性格やものの考え方に大きな影響を与えてくれたと思うし、本当に良い成長の場を与えてもらえたと思います。その中でも特に自分にとって大きく心に残っているものをいくつか書きたいと思います。

まず何よりも、麗澤で出会えた友達や仲間、先生方が自分の中で大きいです。正直私は中学受験の時、まさか自分がこんなに家から遠くて森の中にある学校に通うことになるとは思っていませんでした。でもこの麗澤に通っているうちに、この学校に通えて本当に良かったと思えるようになりました。日々の生活の中で、自分では自覚していなくても、多くの事を学んだと思います。特に道德の授業は、いつの間にか今の自分の考え方、性格の基礎になっていたと思います。どんな苦難も自分を成長させてくれる場だととらえることができるようになり、何よりも身の回りにある全ての事に感謝しようと思えるようになりました。麗澤に通えていなかったら、今の自分は居ないと思っています。麗澤で出会えた友人、先生方の一人ひとりが本当にかけてあげられないもので感謝しています。今思い返してみても、私はたくさんの先生方にお世話になってきたし、どの先生も私が感謝しきれないほどの沢山のことを教えてくれました。ありがとうございました。

もう一つ、麗澤で得たたくさんの思い出も心の中に深く残っています。私はこの六年間たくさんの思い出ができました。研修旅行、体育祭、文化祭など様々な行事を通してたくさんの経験をしました。そういった行事のたびにクラスが団結していくのを感じ、そのクラスが好きになりました。特に5、6年時のGクラスでは、最上級生として様々な行事を経験しました。皆と仲良くなれたし、とても絆が深まったと思います。たくさんの行事も大きな思い出ですが、私にとってこの麗澤で過ごした日常が一番大切な思い出です。この六年間を振り返って、いつも私は多くの人に支えられて、刺激を受けて過ごしていたと思います。もう2度とない青春の日々を麗澤で過ごせて良かったと思います。

最後に、これからはこの麗澤で学んだことをいかして、お世話になった人達のためにも、精一杯社会に貢献できるように努力していこうと思います。また、麗澤で出会った全ての人に感謝しながら生きていきたいです。

高校三年間を振り返って

6年I組 三浦 優太

私はこの三年間で多くのことを経験し、学ぶことができました。私は高校生活のほとんどを寮で過ごし、部活に費やし、勉強のことは何も言えませんが、日々充実した三年間だったと思います。その中で、私が学んだことについて三つほどお話しします。

一つ目は寮生活を通して学んだことです。麗寮に入って、人間は決して一人では生きていけないということを実感しました。私は寮長という立場を頂き、周囲にいる人のことを中心に考えるようになりました。どうやったら後輩たちが成長できるか。どうやって良い上下関係を築けばいいのか。一人で考え込んでしまって、一時期誰とも何も話したくなくなってしまい、自分の殻に閉じこもっていました。人で悩んでいても何も解決せず、何をやるにしても上手くいきませんでした。そんな時、ある先生が声をかけてくださり、思っていることを全て話しました。その結果、少し気持ちが楽になり、乗り越えることができました。他にも私が寮の仕事でミスをした時、同級生みんなが励ましてくれました。このように、普段一緒に生活をしている人や、またそうでない人も私のことを支えてくれました。今は逆に、今までの恩を皆に返せるように日々生活しています。今も大きな悩みを抱えていますが、自分の殻にこもらず、早く解決できるように頑張っています。支え合う大切さを知り、それを生かして生活していきたいと思います。

二つ目は部活動の中で、私は好きなものには夢中になり努力をしたら結果がついてくることを実感したことです。私は十二年間野球に触れ合ってきました。高校に入り、今までの練習よりも格段にハードになり、また、自分自身で考えて動くことが多くなりました。学年が上がるにつれて様々なことを試行錯誤しながら取り組むようになりました。自分の欠点を見つけ、それをどのように長所に変えるのかなどを考えていました。結果として最後の大会で三回戦まで進出し、個人としてはランニングホームランを打つことができました。その時の打った感触や歓声は今でも残っています。このように、私は好きなものには夢中になり、その結果は良いものだと感じました。現在は受験に向けて勉強しています。今は勉強が苦行にしか感じませんが、早く勉強に夢中になれるように好きになれるように頑張ります。そう思えば結果は決して悪いものにはならないと思うので、目標の大学に入れるように精進します。

三つ目はILコースに入りコミュニケーションを取ることの楽しさを知ったことです。ELAの授業では、二人一組で会話をしたり、グループで一つのプレゼンテーションを作ったりと、皆とコミュニケーションを取る多くの機会があります。クラスメイトの意見や考え方を聞いたり、逆に自分の意見や考え方を伝えたりすることは、とても重要だと思いました。それに加えて、オーストラリア研修の際にもコミュニケーションの大切さを実感しました。単語がすぐに出てこなかった時、身振り手振りでなんとか伝えることができたといったことを数多く経験することができました。ILコースに入って苦しいことや辛いことが多く大変でしたが、それによって多くの人とコミュニケーションを取る大切さや楽しさを見つけることができました。

この三年間を通して、支え合うことは人として重要だと学んだこと、好きなことに夢中になり一生懸命取り組めば良い結果はおのずとついてくること、人とコミュニケーションを取ることの

大切さや楽しさ、その他数多くのことを学ぶことができました。ここで得た経験をこれからの大学生活の中で、また社会の中で実践していき、さらに多くのことを学んでいきたいと思います。三年間、いや六年間、本当にお世話になりました。

「伝統を祖述して義務を先行す」

6年D組 篠原 有輝

この格言は、義務先行の基本的精神を述べたものです。ここでの「伝統」とは、過去の恩人の系列のことです。伝統を祖述するというのは、伝統から受けた恩恵を自覚し、伝統の心をもってそれを現代に役立たせていくということです。「義務」とは、私たちに課せられている道徳的な義務を指しており、この世に生きることに感謝し、この世の中に役立つように生きる必要があります。義務を先行するにあたっては、諸聖人をはじめとする様々な恩人から受けた恩恵を自覚し、感謝して、伝統の意思を継承し、発展させることが重要となります。

それならば私はいったいどのような恩恵を受けているのだろうかと考えました。そうすると、私の祖母のことが頭に浮かびました。ちょうど先日の彼岸の時に、私は祖父のお墓参りに、何か月かぶりに祖母の家を訪ねました。祖母は私を温かく出迎えてくれました。その後私は家の掃除をしたり雑草を刈ったりと家の手伝いをし、それを終えた後、祖母と1対1で話す機会がありました。そこで祖母は私に「自分の心に芯を持つ」ということを話してくれました。自分の今やっていることにあまり気乗りしていなかったり、本当にやりたいことではないことをしたりしていたとしても、心に大黒柱のような一本の柱、つまり「芯」があれば、己の心は傾かず、真の目標を見失わず生きている、というものでした。この話を聞いて私は、自分にはまだこれといった確かな柱となる心持ちは備わっていないことに気付きました。これからの長い人生を充実したものにするために、しっかりと己の心の芯を見つけられるように努力していきたいと思いました。

祖母という恩人から受けた恩恵、先人から受けた恩恵、様々な恩恵を受けた上で成り立っている私たちの暮らし。これらの恩や伝統を引き継いで、これからの社会に生かしていくという義務を果たしていきたいと思います。

「慈悲寛大自己反省」

6年D組 田中 淑子

この格言は、聖人の教えに従い、神の心を体得して慈悲となり、伝統を尊重し、世界の人心を開発し救済しようという偉大な希望のうえから、他人を愛し、他人の過失悪行を許し、どのよう

な場合にもすべての責任を自分に負って反省し、無私の至誠をもって努力するということです。

私はこれまでの寮生活を振り返り、この格言の重要さに気がつくことができました。寮生活では、親元から離れたことで両親や家族への感謝、家があることのありがたさを感じます。また、離れていても自分を支え続けてくれることで一日一日を頑張ることができます。四年生の際は、主にこのようなことを感じました。

しかし、学年が上がると下級生のお世話をさせていただくことになり、その時にこの格言の大切さを感じました。共同生活をする中で、人の長所や短所がよく分かります。特に下級生の失敗や短所にばかり目についてしまいます。私はそれをすぐに注意してしまい、自分も相手も嫌な気持ちにさせてしまうことがたびたびありました。寛大な心でその失敗を受け入れていたら、結果は違ったものになったはずだと今では後悔しています。私はこの格言を読んで、改めて「寛大な心」の必要性を感じました。寮に限らず、世間には様々な人がいます。自分と価値観が合う人もいれば、合わない人もいます。自分と合わない点があるからといって、すぐにそれを指摘するのではなく、新しいものの見方や考え方だと思って受け入れる大切さを感じました。また、他人の過失を許すということは私にとって大変難しいですが、意識して生活するようになりたいと思います。

今後、受験期になると自分のことで精一杯になり、周りに対する配慮が欠けてしまうと思います。しかし、このことを忘れず、どのようなことがあっても寛大な心で物事を受け止めるようにしたいです。そして、残り少ない寮生活をさらに学びの多いものにしていきたいと思います。

「篤く大恩を念いて大孝を偲ぶ」

6年E組 木村 董

この格言は、諸伝統の恩恵によって私たちの今日があることを自覚し、感謝してその慈悲の心を受け継ぐという意味があります。

私はこの格言を見て、テニスのことを思い出しました。私は5歳の頃からテニスを習っていて、選手として大会に出場してきました。先日、最後のインターハイ予選がありました。今までのインターハイ予選では悔しい思いばかりしていたので、今年は絶対にインターハイに出場したいという思いを持って日々の練習に取り組んでいました。枠は5本あって、私はベスト4をかけた試合で負けてしまったので、残りの1本をかけて2試合戦いました。5位決定戦の前はとても緊張して堅くなってしまいましたが、家族やコーチが励ましてくれて、試合にはリラックス入ることができました。その日はもう既に2試合していたので、身体は疲れていたし、プレーも絶好調ではありませんでしたが、コートサイドからのチームメイトの応援のおかげで背中を押され勝つことができました。試合が終わってから、数えきれない程の人達がおめでとうと言ってくれて、私のために泣いてくれる人もいました。その時、たくさんの人に支えられてここまでこれたんだ、ということを感じました。5歳から今までずっとテニスを習ったり、当たり前のよ

うに学校に行ったりしているのも、幸せなことなんだと気づきました。たくさんの人に支えられて生きているというのを自覚し、そのことに感謝をしながら日々を過ごしていきたいと思えます。そして将来は、誰かを支えその人の幸せや成功を心から喜べるような人になりたいし、そういう職業に就きたいです。

「意なく必なく固なく我なし」

6年G組 小村 雛子

この格言の意とは自分の主観だけで物事を判断することで、必とは自分の考えを押し通すことです。固とは一つの判断に固執することで、我とは自己中心的に物事を考えることです。これらを排し、すべてのことに広い心をもって柔軟に対応し、どのような場合でも相手の立場を思いやって行動しようという意味です。

私はこれを読んで、将来私が目指す看護師像にも当てはまると思いました。私は訪問看護師になって患者さんやその家族が地域で自分らしく暮らせるお手伝いをしたいです。将来関わっていく患者さんには様々な方がいます。暮らしてきた背景や置かれている状況が異なるため、私の主観で判断してしまえば、相手に適した看護は提供できません。また、他の職業の方と連携し、協働していく上で、自分の意見を押し通そうとしていると、相手の意見を聞くことが疎かになってしまいます。このような状況になると、次第にコミュニケーションがなくなり、意志疎通が図れなくなることとなります。

こうならないために、この格言にもあるように、あらゆることに寛容に対応し、どのような場合でも相手の立場を思いやって行動することが大切だと思います。自分の意見や主張をよく聞いて理解し、相手と良い関係を結んでいきたいです。そして、私が提供したいと考えている看護の実現に繋げていこうと思います。